

映画で社会を動かす

映画監督 小原浩靖



私はこれまで3本のドキュメンタリー映画を作ってきました。中国残留孤児とフィリピン残留日本人を描いた『日本人の忘れもの フィリピンと中国の残留邦人』（2020年）。関西電力大飯原発の運転差止めを命じた樋口英明元裁判長と福島で被災から立ち上がる農業者を描いた『原発をとめた裁判長 そして原発をとめる農家たち』（2022年）。その続篇にあたる『陽なたのファーマーズ フクシマと希望』（2025年）。私はいつも映画の力で社会を動かし、問題を解決することを目標にしています。この寄稿では、私の映画がどのように社会に作用しているのかをお伝えします。

『日本人の忘れもの』は日本政府を動かしました。中国残留孤児の現状とまだ知られざるフィリピン残留日本人二世の日本国籍回復を描きました。戦前まで米国領だったフィリピンには、およそ3万人を擁する日本人社会がありました。日本から出稼ぎにきた男性の多くは世界的流通に成功したマニラ麻の繊維産業に従事し、現地の女性と家庭を築いていたのです。太平洋戦争勃発で日本の軍政が敷か

れたことにより、男たちは軍人・軍属に徴用されましたが米軍の報復で敗戦、日本に強制送還されてしまいました。残されたフィリピン人の妻と子どもたちは、日本人であることが知られることを恐れ、婚姻の証拠や出生証明の書類を捨てて離島や山の奥深くに身を隠して暮らし始めました。当時の法律ではフィリピン人の妻も二人の間でできた子どもも国籍は日本です。日本の占領時、フィリピン人は日本軍によって酷い差別と迫害を受けていたことから、日本人であることが分かれば殺されてしまう可能性があったのです。

この映画がどのような社会に作用しているのかをお伝えします。



写真1 3作品のポスター

日本人として育てられ、日本の名前を持ち、日本語を話し、日本人学校に通う豊かな暮らしを送っていた子どもたちは一転して人里離れた場所に身を隠し、日本語も名前も捨てて教育を受けられない状態に陥りました。この子どもたちのことをフィリピン残留日本人二世と呼びます。映画は、無国籍状態のまま平均年齢80歳を超えた残留日本人二世たちを探し出し、日本国籍回復のために奔走する弁護士たちと支援団体のみなさんの活動を描くことで、この問題の周知はもとより、日本政府に解決を促すことを目的に作られました。

映画が完成するとすぐに国会議員らにDVDの配布や参議院会館での試写などを始めました。この活動のあいだに見えてきたものは実にこの問題が知られていないということでした。超党派で組織される日比友好議連の議員ですら、残留日本人二世の存在自体を知りませんでした。中国残留孤児の認知度とは雲泥の差で

す。

コロナウイルス災禍の公開で劇場の動員がままならない中、立憲民主党の白眞勲議員が本作をご覧になり、支援団体であり映画の中で活躍するNPO法人フィリピン日系人リーガルサポートセンターに協力を申し出てくださいました。白氏は自身が在日韓国人二世であることから国籍による差別を強く憂い、当該問題の解決に行動を起こしました。まず、2021年5月25日の外交防衛委員会で作本のワンシーンを引用しながら茂木敏充外務大臣らに問題への理解を促しました。さらに2022年3月10日には参議院予算委員会で岸田文雄総理大臣らに対して同様に訴えました。総理は「政府一丸となって問題の早期解決に務める」と明言しました。

そして2025年4月29日。石破茂総理大臣はマニラで残留日本人二世の代表者と面会し、「政府として国籍回復を支援する」と明言。在マニラ日本大使館の大使、領事らの支援活動が活発化し、塩村あやか氏など、白氏のあ

とに続く国会議員も現れました。しかし、まだまだ問題の終わりは見えません。ご高齢の残留二世の方々の「日本人と認められたい」という生涯の願いをかなえられるよう一層の支援が必要です。その第一歩として映画は政治を動かしたのです。

『原発をとめた裁判長 そして原発をとめる農家たち』については、制作の経緯からお伝えしましょう。きっかけは『日本人の忘れもの』のプロデューサーであり脱原発弁護団全国連絡会の共同代表・河合弘之弁護士からのひと言でした。2021年2月、河合さんから「小原さん、樋口理論を映像化してYouTube（YouTube）で公開しようよ」というご提案をいただいたのです。

2014年5月に福井地方裁判所で関西電力大飯原子力発電所の運転差止命令を下した裁判長・樋口英明さんは、定年退官後に、原発がいかに地震に弱いのかを理論立て、それを啓発する講演活動を始めました。その理論は通

称【樋口理論】と呼ばれ、全国の原発差止訴訟の重要な争点になっています。その理論は次の5節で構成されています。

- 1 原発事故のもたらす被害は極めて甚大である。
- 2 それゆえに、原発には高度の安全性が求められる。
- 3 地震大国日本において原発に高度の安全性があるということは、原発に高度の耐震性があるということに他ならない。
- 4 しかし、わが国の原発の耐震性は極めて低い。
- 5 よって、原発の運転は許されない。

樋口さんは訴訟で大飯原発の耐震基準がいかに甘く見積もられているかを知り、退官後、独自に全国各原発の耐震基準と2000年から20年間に起きた地震の強さとを比較しました。その結果、すべての原発の耐震性は極めて低いことが明白になり、この理論を確立しました。さらに一般の戸建て住宅

の耐震性能は原発のそれをはるかに上回ることも解り、この理論は揺るぎないものとなりました。

河合弁護士が言った「樋口理論の映像化」とは、地震の加速度を表すガルという単位を用いて各原発の耐震性能、2000年以降に日本で起きた地震のガル数、住宅メーカーの耐震性能をグラフで可視化して解説することでした。

河合弁護士からの提案を受けた私はユーチューブで公開することにはすぐに反対しました。絶対に映画にするべきだと思ったのです。ユーチューブは視聴者が趣味趣向に合った動画を好んで見る傾向が強く、公開しても脱原発を標榜する限られた人たちにしか届かない恐れがあります。内輪受けのように「そうだ、その通りだ」と盛り上がったとしても社会を動かすインパクトにはならない。対して映画館で公開されると、街ゆく人がポスターを偶然見かけ「よく分からないけど、面白そうだから観てみよう」というように問題意識を持たない人にも届けることが可能

で、それこそが社会的インパクトにつながるのです。河合弁護士に私の考えを話すと、「よし分かった。小原さんの思うように企画してみて！」と映画プロデューサーの役を買って出てくれたのです。

私はすぐに頭の中で映画の輪郭線を描きました。樋口さんの活動を追うことと樋口理論の映像化は必須です。講演会で全国を飛び回り、樋口理論を著書『私が原発を止めた理由』（2021年、旬報社刊）にまとめた樋口さん。裁判官の多くは退官後、弁護士になる人がほとんどですが「そんなことをしている場合ではない」と人生を脱原発にささげています。映画の主人公として申し分ないキャラクターです。しかし、私はもっと膨らみのある映画にしようと別の輪郭線も描きました。原発に替わる電力の提示です。

私は2016年に河合弁護士と共に千葉県匝瑳市のソーラーシェアリング農場を訪問しました。映画『日本と再生』（河合弘之監督2017年公開）

の撮影でした。営農型発電とも呼ばれるソーラーシェアリングは、農地上に太陽電池パネルを張り巡らすことで農場を発電所化し、農家が電力を販売する取り組みです。この画期的なシステムに触れて私は、ソーラーシェアリング農場誕生の様子を撮ることができれば映画になると感じたのです。地上では種がまかれ、発芽して花を咲かせ作

物が収穫される。その中空では支柱が建てられ、太陽電池パネルが並べられて発電を始める。ひとつの場所でふたつのストーリーを描けると確信したのです。

樋口さんの生き方とソーラーシェアリング農場誕生の映画。樋口さんに映画の構想をお伝えすると二つ返事でご



写真2 上：近藤恵さん／下：樋口英明元裁判長の講演会

登場を快諾していただきました。問題はソーラーシェアリング農場の誕生を撮ることができるかです。映画に出ていただける農家さんを探すのに時間がかかると思っていましたが、意外にもすぐに見つけることができました。

河合弁護士の提案から1か月も経たない2021年3月11日、私はユーチューブで生配信された「福島からエネルギーを作る」という番組を見ました。そこに登場したのが本作のもうひとりの主人公・近藤恵さんでした。近藤さんは福島県二本松市で有機農業を営んでいましたが、原発事故で拡散された放射性物質によって農業を続けることを断念しました。しかしソーラーシェアリングに出会い、発電事業も行う農業者として新たなスタートを切るとのこと。農場の規模は東京ドームの面積を超える6ヘクタール。間もなく着工すると言うのです。私は近藤さんこそが映画のもうひとりの主役にふさわしいと直感して、日本を代表する再生可能エネルギーの立役者、環境エネルギー政策研究所所長の飯田哲也さん

に近藤さんをご紹介いただきました。

私が脱原発と再生可能エネルギーをひとつの映画のテーマにした理由は、河合弁護士や飯田哲也さんとの十数年のおつきあいを感じた脱原発派と再生推進派の乖離でした。河合さんも飯田さんも「脱原発のための再生エネ」、「再生エネ普及の果ての脱原発」を目指しておられるのですが、実際には両者の交わりは乏しいのです。意外にも脱原発派の方々はソーラーシェアリングを知らず、再生エネ推進派の方々は大飯原発樋口判決の内容を知らない方が多いのが現実です。それならば、映画で両方を知ってもらおうと狙いを定めたのです。もちろん問題に関心がない方、原発稼働を容認する方、原発推進派、福島事故を知らない若い世代に映画を届けることが大切な目的なのですが、交わりやすいはずの両者を一つにまとめる重要性もあるのです。

話を戻します。近藤恵さんに映画へのご登場をお願いしたところ、快くお引

き受けくださいました。ドキュメンタリー映画に出るということは、その人の人生に少なからず影響を及ぼします。よい影響であればいいのですが、その逆になる危険性もあります。私のように大きな実績のない監督の依頼を引き受けるまで近藤さんは悩まれたと思います。今となっては映画の影響で近藤さんの取り組みは広く知られて応援する人たちもたくさん現れたので結果的には良かったのですが、作品が完成するまでは心配されていたと思います。

初めて近藤さんとお会いしたのは企画開始から3か月後、二本松市笹屋にある整地中の広大な農場でした。ジャングルのように荒れていた元水田の耕作放棄地が更地に生まれ変わろうとする様子を案内していただきながらの撮影でした。身長182センチ、よく喋り、よく笑い、身振り手振りの大きな近藤さんをファイナダー越しに見て「この人はスクリーンに映える。たくさんのお客様がファンになる」と思いました。劇映画もドキュメンタリーも完成度は

キャストینگで決まります。原発事故で人生を変えられてしまった悲哀よりもこれから始まる大事業への期待に胸膨らませている明るい人。これが近藤さんの第一印象でした。

一方、樋口英明さんに初めてお会いしたのも同じ5月。広島地方裁判所での四国電力伊方原子力発電所の仮処分申立て期日の集会でした。樋口さんは河合弁護士からの依頼で弁護団のアドバイザーとして参加されていました。ユーチューブで何度も樋口さんの講演会を見ていましたが、実際にお会いして穏やかに、淡々と論理を語りながらも時折一流の冗談を挟む話法に魅了され、映画の主役を張る揺るぎない存在感を確信しました。映画が好きな樋口さんは、ドキュメンタリーをどうやって作るのかに大変興味があり、私の作法を熱心にニコニコ笑いながら聞いてくださいました。

この映画の登場人物は樋口さん、近藤さんをはじめ河合弁護士、近藤さん

と共にソーラーシェアリング事業に乗り出した二本松有機農業研究会代表の大内督さん、大内さんの父で福島有機農業創始者の大内信一さん、近藤さんの元に農業高校卒業後すぐに就農した塚田晴さん、二本松で生まれ、30代半ばに近藤さんの会社で就農した菅野雄貴さん、クレヨンハウス主宰で作家の落合恵子さん、私と近藤さんをつないでくださった飯田哲也さん、そしてソーラーシェアリングの生みの親である長島彬さんという顔ぶれになりました。

公開後、舞台挨拶や自主上映会の講演で私は冒頭に「この映画は登場人物全員がカッコいい珍しい作品」と話していますが、みなさん一本気で信頼をおける人物でスクリーンからそのパワーが放射されています。特に農業者のみなさんの言葉の説得力、晴れやかな笑顔に魅了されたお客様がたくさんいて、二本松に農場見学に行く人たちもいるほどです。

本作では撮影も録音も私が一人で担いました。理想的なドキュメンタリー

撮影の座組は監督、カメラマン、録音技師の三人体制なのですが、撮るものは自然相手の農業、種まきや定植、収穫も天候次第になり、その都度スタッフの予定を合わせることはできないので全て私が担当しました。「明日小麦を刈り取ります」と連絡を受けたら日の出前に車で東京から4時間の二本松に向かう。そういうフットワークで挑まなければ農業は撮れません。当時はコロナ禍中の撮影だったこともあり、一人で撮ることでみなさんから安心していただけた利点もありました。また、小さなハンディカムでの撮影は物々しさがなく、ごく自然にみなさんの仕事ぶりを撮ることができ、被写体との精神的な距離も縮まります。これは樋口さんの撮影でも同じで、講演会で来場者を撮らせていただくときにも有利でした。大きなカメラでは被写体を緊張させてしまいがちですが会話を流れですんなりインタビューを撮ることができます。そして、一人での映画作りは大幅なコストダウンがかないます。

撮影期間は5月から11月までの7か月間でした。この間に触れた農作業と農業者のみなさんに私は大いに刺激されました。月日とともに育つ作物の美しい変化、きめ細かな作業で我々の食を担う農業者みなさんの努力と実りに感銘を受けたのです。

拡散された放射性物質で福島農家は壊滅的な被害を受けました。近藤さんの師匠である二本松有機農業研究会の前代表・大内信一さんに私はインタビューで「事故後どのようにして農業を続けられたのか」と質問したところ、信一さんは次のように答えてくださいました。

・春先に植えたほうれん草から基準値を大きく超えるセシウムが検出され、トラック10台分を廃棄した。

・一方で、同じ畑に植えたネギからは全くセシウムが検出されなかったことから、葉を広げたほうれん草がセシウムを受け止めて土を守ったのだと推測。

・その後、ネギを何度検査してもセシウムは検出されなかった。土からセシウムは検出されるが、ネギはセシウムを吸収していない。

・ほかの作物からも基準値を超えるセシウムは検出されなかった。

・有機農法の養分豊かな土で育てた作物はセシウムを吸収せずに育つと推測。

・二本松の土は粘土質が高いためセシウムを定着させ、植物は養分だけを吸収する。

大学教授とともに研究した右の考察で信一さんは「植物からその能力を教えてもらった」とおっしゃいました。

事故を機に福島から離れた農家さんは多くいます。50年間に有機農法を研究してきた信一さんも当初は農業を諦めなければならぬかと考えたそうです。信一さんを知る全国の有機農業者

の方々は映画で信一さんの笑顔をご覧になり、お元気でよかったとおっしゃいました。

多くの農業者を苦しめる原発事故は日本の食料事情を悪化させます。カロリーベースで38%という食料自給率は日本という国の脆弱性そのものだといえます。それに加えて地震大国でありながら数多ある原発はテロの標的にもなる。日本は食もエネルギーも極めて危うい状態です。私は原発と農業を映画のテーマにしたことに作家としての大義を感じながら制作していました。

劇場公開は2022年9月10日。この年は原発問題が社会的にクローズアップされました。3・11以降、原発の勢いはどんどん弱くなっていました。2月に起きたロシア・ウクライナ戦争でロシアがザポリージャ原発を攻撃。放射性物質拡散の危険性が再び注目されました。その中で6月に岸田首相が原発再稼働、新增設を宣言したことから社会的な不安が増して報道でも原発問題が多く扱われました。これ

によって本作は公開前から話題の映画になりました。東京のポレポレ東中野での単館公開初日は満席になり、公開期間中、座席はほとんど埋まりました。

原発問題を扱った映画の客層は、どの作品も60代以上が大半を占める傾向にあるのですが、本作は違いました。30、40代が多く、大学生もたくさんご来場いただきました。前述の通り原発が話題になった影響が大きく、日頃から食の安全性を重んじている若いお客様が目立ちました。意識の中で薄れていた原発問題が本作で蘇り、原発事故の記憶がほとんどない学生さんにも事故が起これば生活まるごとが変わってしまうことを強く印象づけられたと思います。

本作が社会を変えるきっかけになると感じた出来事がありました。劇場の舞台挨拶を終えた私に早稲田大学の男子学生が「この映画を大学で上映したい」と声をかけてくれました。翌年、彼は仲間4人と企画して平和学の授業で上映会を催してくれたのです。しか

も樋口さんと私をお招きいただいて250人の学生さんたちとのトークセッションも行われました。また、国際基督教大学の女子学生が本作を大学の教授に強く勧めてくださったことから日本国憲法と新約聖書の授業での上映も実現しました。ものすごい行動力を発揮する学生さんたちを目の当たりにして、私は改めて映画には社会を変える力があると確信しました。

私は各地の劇場で可能な限り舞台挨拶に登壇したのですが、お客様との対話で特に印象に残ったことがあります。各地で何人の方が同様のことを話してくださいました。内容を簡潔に書きます。

- ・福島原発事故以降、自分も周囲の友人も脱原発のためのデモや投票行動をしていた。

- ・年月が経つにつれ、同じ志をもっていた人たちから「再稼働も仕方がない」という意見が増え始めた。

- ・周囲の変化に「私は間違っているのか……」と思い始めた。

- ・この作品を観て、私は間違っていないと確信を持てた。

世情は実に移ろいやすいです。加えて政府と大手電力会社による福島事故の実態から目をそらせる施策とジャーナリズムの無関心が原発を憂う人たちの心を惑わせているのです。映画を観終えて私に泣きながら「観てよかった」とお話しくださる方々に心を揺さぶられました。

劇場公開が終わった2023年2月から自主上映会の募集を始めると本当にたくさんのお申込みがあります。現時点までで230超の団体が各地で上映の輪を広めてくださっていて今も続いています。

福島の農業者さんたちとの交流はその後も続きました。近藤さんは常に新しい試みを行い、ソーラーシェアリングの可能性を日本中に広める努力を続けています。2023年の5月に「牛

を飼い始める」と近藤さんから連絡をいただきました。「ソーラーシェアリングで畜産？」と面白く思った私は牛が農場に来る日に撮影に行きました。映画を撮るといっても面白い出来事を映像に残したかったです。農場にやって来たのはホルスタインの雄の仔牛2頭でした。5か月ほど太陽光パネルの下で育ててから出荷するのと。

牛を飼う理由は、大きな石がたくさん埋まる耕作に向かない場所の有効活用です。石のために耕作機が壊れてしまう一部の場所は放っておくと雑草だらけになるため、近藤さんたちは牛を放牧して草を食べてもらうことを思いつきました。もちろん牛が好きな牧草も育てます。また、この農場にたくさん訪れる視察団にソーラーシェアリングの幅広い活用法を示すという理由もあります。牛がいることで農地は活き活きと見え、視察者たちに愛着を感じてもらえるのです。

原発事故の被災から立ち上がった近

藤さんは、単に農家として復活しただけではなく、ソーラーシェアリング推進連盟の共同代表として日本の電力の在り方を変えようとしています。牛を撮りに行ったことをきっかけに私は近藤さんの活動を多くの人に知ってもらいたいと思い、映画を作る決意をしました。

『陽なたのファーマーズ フクシマと希望』には、近藤さんの二本松農場のほかに福島県伊達郡川俣町の齋藤広幸さんのソーラーシェアリング農場も登場します。前作のワンシーンにも登場した齋藤さんは、原発事故を機に2014年に脱サラして9代目を継いだ代々続く農家さんです。地元企業で工場の機械設備を設計施行する技術者だった齋藤さんは、なんと、ご自身でソーラーシェアリングを設計施行できるのです。太陽光発電を始めたきっかけは、2012年にご自宅の倉庫の屋根に太陽光パネルを設置したことでした。当時中学生だった次男の幸人さんと一緒に設計施行できた喜びと原発に

頼らない電力で生活できる確信、そして余剰電力を販売して収入を得られたことから、農地のソーラーシェアリング化に踏み切りました。

齋藤さんの集落の農家は原発事故後、次々と耕作を断念していききました。何を作っても売れないという放射能被害の実態です。齋藤さんはそれらの農地を次々と借り受けてソーラーシェアリング化しました。太陽光パネルの異物感から、始めた当初は周囲の人たちに理解されなかったものの、今では蘇った農地を見た集落の人たちから応援されています。

この作品は1年8か月かけて撮影しました。四季の変化と自然の力を利用した農業を描くには必要最低限の期間だったと思います。また、被災地福島放射線物質の除染の実態も描きました。今も福島県浜通りの6市町村では除染作業が行われていて、毎日黒いフレコンバッグを積んだトラックが大熊町と双葉町にある中間貯蔵施設まで運

んでいます。浜通りと中通りを結ぶ国道114号線の山道を通ると3台1組のトラックをよく見かけます。その数は1日延べ約200台。山林や集落、農地の除染作業はいつ終わるのかめどが立っていません。ニュースにならず、ほとんど知られていないこのことを描いたきっかけは、前作の早稲田大学での上映会で「原発が爆発する映像を初めて見て驚いた」という感想をいただいたことでした。原発事故を知らない世代が大人になっていくのであれば、事故を振り返るのではなく、現在進行形の被害を描こうと思ったのです。除染される場所の多くは元農地、広大な中間貯蔵施設も元は農地なのです。

そして歴史的な大飯原発差止訴訟判決の法廷で樋口英明裁判長が判決要旨を朗読したことも実はあまり知られていません。私は樋口さんをお願いして朗読を再現して撮影しました。映画の歴史に尊い樋口判決を刻みたかったです。

私はやはり、映画には社会を変える

力があると感じています。本作には前作を観て大学での上映を実現させた国際基督教大学の女子学生二人が登場しています。彼女たちは近藤さんの農場に1週間の自主研修にやって来ました。映画の世界を実際に見たい、体験したいと思ったのです。社会全体から見れば小さな出来事かもしれませんが、しかし、彼女たちは映画によって変わり、行動し、ソーラーシェアリングを身をもって知ったのです。

『陽なたのファーマーズ』は2025年9月6日に公開され、2026年3月から自主上映会が各地で開催されています。

映画は作家が考えてもいないことを起こします。ドイツに本拠地があるハインリヒ・ベル財団東アジア(韓国・ソウル)が本作の英語・韓国語字幕版の制作費を全面支援してくださいました。2027年に韓国で8回、ドイツで1回の上映会が開催されます。英語字幕版ができたことで世界各地でもご覧いただけることになりました。

これから映画がどのように育っていくのか楽しみです。ここまでお読みいただいた方はぜひ、自主上映会に足を運んでください。上映会スケジュールは『陽なたのファーマーズ フクシマと希望』公式ホームページ (<https://hinata-movie.com/>) で確認いただけます。

(2026年4月2日・公開講演会)

筆者略歴(おばら・ひろやす)

1964年、大阪生まれ。大阪芸術大学映像学科卒。

TVCM700本以上。『日本人の忘れもの フィリピンと中国の残留邦人』第26回平和・共同ジャーナリスト基金賞、第38回日本映画復興賞ともに奨励賞。『原発をとめた裁判長 そして原発をとめる農家たち』第12回江古田映画祭グランプリ。最新作は『陽なたのファーマーズ フクシマと希望』。